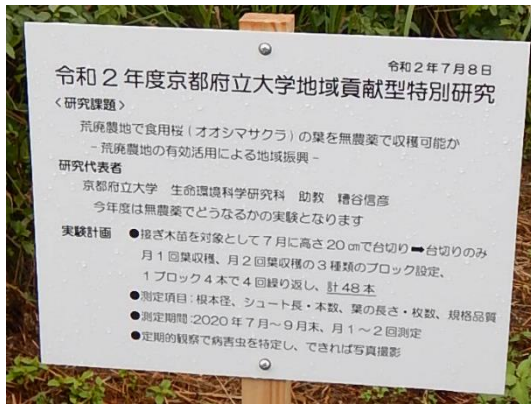


令和3年度 ACTR

分類 番号	A12	取組 名称	荒廃農地で食用桜の葉(オオシマザクラ)を無農薬で収穫可能か ー 荒廃農地の有効活用による地域振興ー
研究代表者所属・職名：		生命環境科学研究科・助教	氏名： 糟谷 信彦
研究担当者： 京都府立大学（宮藤久士・池田武文・松谷茂）			
主な連携機関（所在市町村、機関（部署）名） 京都府与謝郡与謝野町商工振興課， 京都よさの百商一気合同会社			
【研究活動の要約】			
<p>桜の葉の国内消費の60%が中国産、40%が国産(そのうちの7割が静岡県賀茂郡松崎町)で、国内の生産現場は高齢化が進んでいることから新たな産地が必要とされている。食用の葉については、明確な品質が求められるが、無農薬栽培であれば一層付加価値が高まる。</p> <p>1) 高品質な桜の葉が無農薬でも栽培可能な条件の検討を行った。具体的には、高さ50cmで幹を切断した後に再生してくる葉について、毎月一回葉を採取、放置区(最後に一度だけ葉を採取)の2処理区を設けそれぞれで葉のサイズ、品質、枚数を測定し、比較した。</p> <p>2) 専門家の指導により、まだ苗木のサイズが小さかったため試験区以外の葉の採取にはもう一年待ち、次年度5月より開始することとした。一方地元では自ら商品化を行うべく、先進地視察を行っている。</p>			
【研究活動の成果】			
<p>与謝野町の試験地において、葉の収穫を行わないC区(対照区)、月に一回葉を収穫するI区、の2つのブロックを設定した。2021年6月から10月にかけて葉のサイズ、品質、枚数を測定し、比較したところ、葉のサイズ(長径、短径)は6月から10月にかけてC区では変わらなかったのに対し、I区では長径が変わらずに短径だけ小さくなり、葉の形が細長くなっていた。つまり季節によりI区で得られる葉の形が変化することが明らかとなった。I区での1個体あたりの葉の収穫枚数合計は、平均592枚で、そのうち商品になる葉は212枚で36%に相当した。一方C区では1個体あたりの葉の枚数は7月26日に最大336枚となり、10月25日には159枚と半減した。C区の商品になる葉では6月28日に最大の98枚を付けていた。つけている葉のうち商品になる確率(%)で見ると、6月～10月にかけてC区、I区いずれも減少していた。C区は最初が76%で最後0%になり、I区でも最初66%、最後0%であったが、途中7月末以降の減少幅がC区よりもかなり小さかった。試験開始2年目の結果においてC区とI区を比較すると、I区は、C区に比べて商品になる葉(枚数)を約2倍収穫することができた。今回の2年間データが、これからオオシマザクラの葉の収穫予想のための貴重なデータになることが期待される。</p>			
【研究成果の還元】			
<p>地元の方々には随時報告をし、その結果が令和2年7月以降ずっと現地に看板として付近の住民に説明がなされ、新たに植栽間隔を広げた移植の試みにつながった。与謝野町での研究報告会を以下のとおり開催予定である。日時：4月20日(水) 13:30～ 場所：与謝野町商工会本所大会議室、関係者等約30名「ACTR研究報告会」</p>			
【お問い合わせ先】			
<p>生命環境科学研究科 助教 糟谷 信彦 Tel: 075-703-5628 E-mail: n_kasuya@kpu.ac.jp</p>			

参考（イメージ図、活動写真等）

※試験地横に立てられた本研究の看板(令和2年～)



※実際の試験地の様子



(左, 左中) 試験地測定作業中 (中) 7月28日の葉の様子 (右) 8月24日の写真



スキャンした葉の画像

酷暑の中、直射日光を避けるためテント下で作業